

日本建築の西欧化と近代化

—文明の価値と様式との関連において—

村 松 貞 次 郎

個々の科学や技術のめざましい発達にもかかわらず、公害が頻発し、都市は過密現象に窒息しようとしている。なぜだろうか。それを政治や経済の問題だと冷たくつっぱなしておいてよいものだろうか。われわれの科学や技術は、それを総合し統一するヴィジョンに欠けてはいなかったか。文明の様式について考えざるをえなくなってきた。

1. 文明の価値と様式

幕末から今日まで、約 100 年の間に、われわれは西欧文明を大急ぎで摂取してきた。なぜそうしたかといえ、なによりもまず自己防衛の必要があったからである。そうして同時に、西欧風の文明の様式に一種の快適さを求めてきたからだと思う。

自己防衛というと、おだやかでないが、やはり西欧文明の力におそれおののき、あるいは憧れてきたことは事実で、幕末・明治以来の殖産興業・富国強兵のスローガンも、一種の自己防衛の精神から発したといえる。黒船に驚き、外人を招き蘭（洋）学者を動員して造兵・造船の工場を建設し、長崎海軍伝習所に典型的に見られるような科学・技術教育を開始するなどの一連の歴史は、まさに自己防衛の線からスタートしたものであろう。この傾向は、国のためという意識がきわめて強烈だった明治時代はもちろん、自我の発現がようやく顕著になった大正デモクラシーの時代、さらに昭和戦前の時代を通じて、一貫したものであろう。いわゆる大東亜共栄圏建設の契機となった ABCD ラインのように侵略すべし、心底に自己防衛の要素があった。もちろん顕現の度合には大きな山なりの変化はあったが、やはり底流として一貫していたと考えられる。おそらくこれは後進国として当然なものだった。

自己を防衛するため、逆に摂取しなければならなかった西欧文明の力とはなんだろうか。それは西欧文明の普遍的な価値である。あるいは事実といった方が通りがよいかも知れない。たとえば、その科学や技術、あるいは立憲民主制といった政治組織などである。またヒューマニズムとかエゴイズムに体现している思想も普遍的な価値である。そうしてここ数世代の間に、西洋の力が世界大に拡大するのを眼のあたりに見、あるいはその力に支配され、恐れおののいた非西洋の人々が、西洋文明を世界文明そのものと早合点し、おりあらば自分たちもその力を獲得しようとした、その普遍的な価値である。われわれの祖先が黒船におののき、にわかにも身の構えを固く

すると同時に、必死になって獲得しようとしたものである。その点においては本質的にもっとも保守主義者であるべき軍人すら、もっとも熱烈な近代主義者であった。わが国において、おそらく幕末あたりから用いられたと思われる（この歴史的な研究は今後の課題の一つであるが）和魂洋才という言葉も、こうした西洋文明の力に対する姿勢をいったものであろう。

もっとも、アーノルド・トインビーによれば、民主制は西洋の力の根原ではなく、力によって獲得された繁栄の結果に生まれた“ぜいたく”に過ぎないと、ややアイロニカルに規定されている。しかも、非西洋の諸国が西洋の力を眼のあたりに見たとき、たまたまイギリス・フランス・ベルギー・オランダなどの諸国が議会制の政治形態をとっていたのを、「西洋諸国は民主制の国家である。西洋諸国はきわめて力が強い。ゆえに民主制は強力な力である」という誤った三段論法によって、力と錯覚されたものであるともしている（A・トインビー；黒沢英二訳：文明の実験、毎日新聞社、1963年7月）。それはともかく、民主制という政治形態が、非西洋諸国においてそれぞれの屈折を示しながらも、制度として採用されてきた事実、やはり、それも力の一つとして理解されてきたと考えてよいだろう。問題は、その屈折がなぜ生じたかということである。それはおそらく、もっとも普遍的な価値であり、力であり、事実でもある科学や技術までが、その成長の仕方、発展の形態において、やはりそれぞれの国状や伝統、あるいは精神的風土を反映して、それぞれの特徴な様相を呈していることと相通ずるものがある。科学史や技術史もこの上に成立するものである。

この屈折あるいは特殊性の成立の原因は、文明に様式があるからだと考えられる。普遍的な価値を体系化し、文明を統一するパターンである。それは西洋文明と日本文明のように、個性・独自性・固有性をもつものである。

2. 近代化と文明の様式

今日わが国の近代化についての論議がさかんである。

科学や技術や、その工業化の推進がよりいっそう押し進められなければならないという説がもっとも常識的であって、現実性をもっている。しかし、今日われわれが近代化の方途を問題にしている根底には、そのような科学・技術の発展、工業化の推進の方法論というか、そのまとめ方の方式を決めかねていることがあるのではないだろうか。文明の価値を統一する様式の問題があると思えるのである。

これまでのわが国では、いうまでもなく西洋文明が師であり、典型であった。そうしてその価値を、すなわち力として摂取することに懸命であった。またそれを統一する様式もまた西洋文明の様式を、それほど意識せずに手本としてきた。むしろ価値を獲得するためには、その様式を先行させねばならないと考えられてきたところもある。いわゆる“文明開化”がそうだったと思う。チョンマゲ頭をザンギリにし、下駄を靴にはきかえることは、皮相な西洋文明の様式模写ではあったが、その文明の価値を摂取するためには必要な姿勢であったと思う。様式模写だけが先行し、価値の摂取がおくれたところに奇妙な現象が生じ“文明開化”の特異なニュアンスが生まれたのである。だが、人間はイメージによって行動する動物である。普遍的ではあるが、具体的なイメージをもたない科学や技術という価値を獲得すべく行動を起こすには、模写であっても様式がなければならなかったのである。

この文明の価値と様式、普遍的なものと、がんらい個有のもの、この二つの側面が特定な文明に存在することを認めたいと思うのである。そうでないと幕末・明治以来約百年の日本の近代化の歴史は、ほんとうに分析されないのではなからうか。そうして、今日われわれが、ある意味で近代化の関頭に立っている文明史的な時点が明確に認識されないのではないかと思う。西洋から摂取してきた科学・技術あるいは多くの思想などの価値は、それが普遍的であるがゆえに、今後もますます押し進めなければならない。そのことはまことに結構である。しかし、その押し進め方の問題こそ、われわれの今日の問題ではないだろうか。そこに文明の様式についての考察が始まる。価値の発展のさせかた、進歩の方向こそ、われわれがこれから想定しなければならない、われわれ自身の文明の様式である。それは、従来安易に、便宜的に、その快適さのゆえに採ってきた西洋文明の様式そのままでは意味をなさないと思われる。和洋折衷という妥協案も考えられるが、それは総合でも融合でもなく、むしろ様式喪失の典型である。おそらくそれが今日、わが国が近代化の方途に思い迷っている原因でもあろう。価値をまとめ、われわれの生活に還元する文明の様式を喪失しているからである。しかも、また西洋文明自体にも、内に破局をはらんでいると考えられている。古くはオスワルド・シュペングレー、新しいところではアーノルド・

トインビーなどの所説は、現代の西洋文明は、このまま推移すれば破滅であると主張している。トインビーによれば、西洋文明をこれまで育ててきた基盤の一つであるキリスト教の根底には、ほかを折伏せずにはやまぬインテランスの精神がひそんでいるという。これが西洋文明を規制しているかぎり、その前途には破局が見えているとして、彼は救いを求めて寛容の仏教思想に飛躍するのである。

西洋文明の様式に相変わらず依存する怠慢な立場もすでに先が見えてきた。そうしてまた、価値の無原則な推進も、われわれの生活に真の幸福をもたらすとは考えられなくなった。科学技術の進歩や工業化の発展で、なんとなくわれわれの生活が幸福になるだろうとするのは、楽天主義か、オートマティズム(自動論)にすぎない。唐突なたとえのようなのだが、今日の公害問題、過密都市問題など、まさにわれわれの科学技術の発展に方法論が、すなわち様式が必要であることを痛感させるものであろう。近代化が真の近代化であるためには、文明の価値の発展とともに、それを統一する個有の様式がなければならぬのである。

現代の日本は、すでに一つの西洋であることを認むべきである。それから前向きの姿勢が生まれるとして「西洋の思想よりも事実をえらびとるという日本の習性は、今後はこれまでのような有効性をもたなくなるだろう。事実の世界で西洋と匹敵するようになるとしたら、残る問題は新しい事実を生む思想をいかにして培養するか、ということである」(河野健二、西洋への抵抗と同化、中央公論 1962.12) という意見もある。しかしここでいう“思想”とは、おそらく私のいう様式に近いものであろう。そうして、その“思想”を培養することは、すなわち現代の日本が“一つの西洋”から離脱して、個有の文明の様式をうちたてなければならない時点に到達していることを意味するのである。

3. 建築が具現する文明

われわれは今、近代化の関頭に立っている、とわれわれがらういふんおおげさな表現をしたものであるが、科学技術のそれぞれの分野においても事の大小はともかく、このような時期にきていることは否定できないであろう。

たとえば私の専攻している建築の分野についてみれば、さきの表現は決してオーバーではないと考えられる。建築は文明のもっとも具体的な表現であるから、極端に言えば近代化に対するあるイメージなしには形をとりえない。いかに建築科学や技術が進歩しても、そのものだけでは形をつくらないからである。その科学や技術を統一して一つの具体的な形にまとめあげるためにも建築家が存在し、その形に千差万別があるからこそ芸術といわれもする。またそのまとめ方に、建築家の文明に対決す

る姿勢があらわれ、それぞれの文明観が形をとるのである。いってみれば経験的ではあるが、それぞれの文明の様式を設定するのである。そうしてそれをその建築の様式と称する。

たとえば西洋建築史の時代区分にも用いられているロマネスクとかゴシック、あるいはルネサンスやバロックなど、意識するとしないとにかかわりなく、その時代の建築家が、その時代の文明の様式を建築の様式としてとらえ、表現したものの集約的なあらわれである。19世紀末に開始された近代建築運動が、たとえそのスローガンに様式との分離を主張し、絶縁を宣言したにしても、それは過去の様式からの分離であり絶縁であって、彼らの作りあげた建築は、また工業生産社会に根ざした文明の一つの様式をまさに典型的に表現しているのである。そうしてその様式を樹立せんがための運動であり、古いものとのたたかいであった。

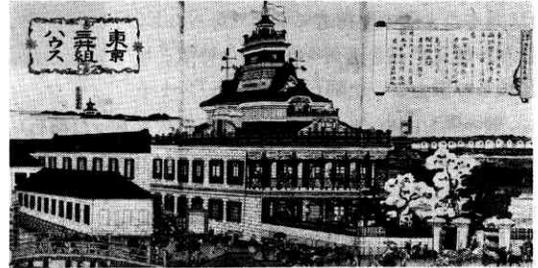
幕末・明治以来今日に至る日本の近代建築も、またわが国の建築家、あるいは建築技術者が把握した文明の様式を、その建築の様式として具現していると考えられるのである。もちろんおくれて国を開いたわが国の歴史的特殊性と、それゆえにまた西洋文明の価値を大急ぎで摂取しなければならなかった事情とを反映して、その様式は必ずしも明確なものに統一されていなかった。また様式よりももっぱら西洋建築の科学性や技術性に傾倒したところもあったし、その逆にまず様式をうつすことに専念する人びともあった。西洋の建築を西洋の文明を象徴するものと見る場合、それを受け入れ、そこにまず近代化のスタートラインを設定したわが国の建築界にも、西洋文明の価値と様式、すなわち西洋建築の科学や技術と、その様式に対してそれぞれの重点のおき方に分裂が見られたのである。和魂洋才、精神と物、技術と様式という二元論は、明治以来今日にもまだ継続している日本の建築家の精神構造の特性である。この二元論を止揚して、価値を統一する新しい建築様式を創造することが、日本の建築界の当面している問題であろう。近代化の具体的イメージも、この観点に立って初めて構想されるものである。

私が研究している日本の近代建築史は、こうした意味で建築の歴史であるとともに、日本の近代文明史の研究に直接関与できるものであると考えている。とくに具体的な形をもっている建築の歴史は、ほかのたとえば社会史や思想史の研究よりもはるかに有利な立場にあると考えている。ただその有利さを十分に生かしえない不敏さを申しわけなく思うのである。

4. 明治の建築に見る西洋への抵抗と同化

明治時代の日本の文明に顕現している西洋への抵抗と同化とは、建築においては、その様式においてまずい

ゆる洋風をとって、西洋文明の様式に同化するとともにまた洋風である限りにおいて抵抗をも示している。新しく迎えた文明の様式に対して、いやおうなしの傾倒を示しながらも、なお伝統的な文明の様式をその細部において主張しているところがある。

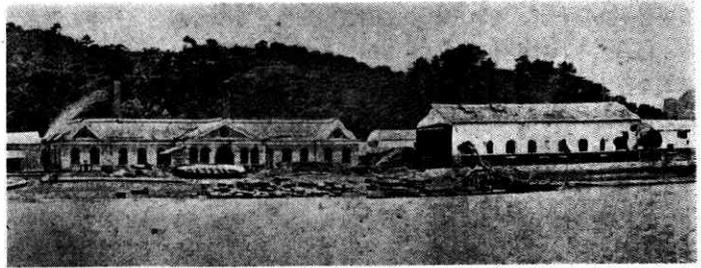


第一国立銀行（清水喜助設計施工、1872年）

二代清水喜助（清矩、1815～81年、現在の清水建設株式会社の祖である）の設計・施工になった築地ホテル館（1868年竣工）や第一国立銀行（1872年）に代表される明治初期の棟梁たちによる洋風建築は、その西洋らしさにおいて文明開化の気運を代表する同化の姿勢ではあるが、そのデザインのディテールに強く見られる日本的手法は、明らかに抵抗の形である。西洋建築のスタイルの学習に未然であり、用うべき材料・手法において欠けていたためとも見られるが、現在まだ各地に残る明治初期から20年代初めにかけての洋風小学校や郡役所などの建築を見るとき、必ずしもそうとはいえない。（明治5年発布された学制に応じて、各地に建てられた学校建築の多くが、稚拙ではあったが、洋風のスタイルを相当無理して採用していることは注目される。文明開化は、まず教育の場においても様式が先行したのである）。彼らはいち早く洋風（あるいは人によっては擬洋風ともいう）の独自のスタイルを形成して、頑固に抵抗を示しているのである。むしろ西洋様式の忠実な採用は、「よりヨーロッパ的なデザインがよりよいもの、よりイギリス的なものがよりヨーロッパ的である」ことを信条とした明治の大学の建築教育において見られるのである。その中心的な指導人物が1877年工部大学校造家学科の教師として来日し、1920年東京に骨を埋めたイギリス人建築家コンドル（Conder, Josiah 1852～1920年）であったからでもあろう。

明治初期の棟梁たちは、彼らの伝統的な気風（日本の棟梁の技術の歴史は、某々流・何々様という様式によって概説できる）によって、西洋建築の様式にいち早く反応を示したが、西洋建築の価値、すなわちその建築を構成する科学や技術にはあまり重点を置かなかった。彼らの理解した様式の範囲内では、窓ガラス・扉金具（特殊な蝶番や錠）あるいはペンキなど、ごく少量の材料や器具を輸入品に仰げば、あとは従来の建築関係職人のきわめ

て高い水準の技術で十分にこなせるものであった。彼らに関係した建築が、どちらかといえば地方の学校や役場、あるいは民間の建築など比較的小規模で、主として木造であったことも、伝統的な技術で処理した重要な理由でもあった。西洋建築の大壁は、日本の土蔵の壁構造で十分であったし、西洋の煉瓦や石造建築の様式的な特徴として彼らの眼をひいた隅石(コーナー・ストーン)。壁の隅を固め、あわせて装飾的な意味ももった積石)やアーチも、色変わりのシックイを盛り上げてそれらしく見せればよかった。かんたんな作業であった。またどんなに西洋らしい外観をしていても、天井を張ってしまえば見えなくなる小屋組(屋根を構成する架構)は、えたいの知れない西洋風の小屋組(洋小屋。おもにトラスの架構を応用している)でやる必要は毛頭なかった。自信のある和風小屋組で組まれた。これは遺構の調査からしても統計的に実証されているところである。その生産関係もまた、窓ガラスのはめ込み作業は“経師方”、錠は“鍛冶方”ペンキ塗りは“塗師方”(最近重要文化財に指定された松本市の開智学校の工事仕様書。明治8年)というぐあいに、従来の関係において作動していたのである。



1859年(安政6年)ころの長崎製鉄所

それは幕末や明治に建築された工場や鉄道・兵営あるいは中央官公庁等の建築に見られるものである。棟梁たちの洋風建築に比して公的なもの、大規模なものであったことがとくにきわだっている。

幕末や明治初期に幕府や西南の雄藩、あるいは明治政府が建設した工場施設(初期には主として軍事工業のものであった。西洋文明の力の摂取の目的である)に導入された建築技術は、産業革命直後のヨーロッパの建築技術であった。その後の日本建築の技術的発展にまず最初の礎石を据えたものであった。幕府の長崎製鉄所(後の造船所。1863年竣工)・横須賀製鉄所(後の工廠。1865年着工)には、それぞれオランダ、フランスの技師団が招かれ、わが国最初の建築用煉瓦の焼成とかセメントの使用、あるいは製材機械の応用などの新しい技術が導入された。薩摩藩の集成館機械工場(現在の尚古集成館。1865年竣工)には稚拙ながらわが国に現存する最古の木造トラス小屋組や錬鉄製のナッシュが見られ、長崎の小菅ドック巻上げ機小屋(1868年竣工)には、構造材として鉄材が豊富に用いられている。明治初期の大阪造船寮(1871年竣工)や官宮富岡製糸所(1872年竣工)をはじめ



開智学校(松本市, 立石清重設計施工, 1876年, 最近移築復元された)

5. 価値に敏感、様式に鈍感

西洋建築のもつ文明の様式に対してきわめて敏感な反応を示しながら、その価値に対して鈍感だった棟梁たちの手によって設計され、建てられたものを明治時代の建築の中からとくに区別して洋風(あるいは擬洋風)建築とよぶ。“風”はまさにスタイルを指し、さらに様式に重点をおいた設計意図を持っている建築であることをも意味している。

これに対して、西洋建築の摂取の態度がまったく逆のものがあった。その様式に鈍感ではあったが価値に対してきわめて敏感な反応を示した立場である。



官宮富岡製糸所繰糸工場(1872年)。近代建築に通じる機能的な美しさをもっている。

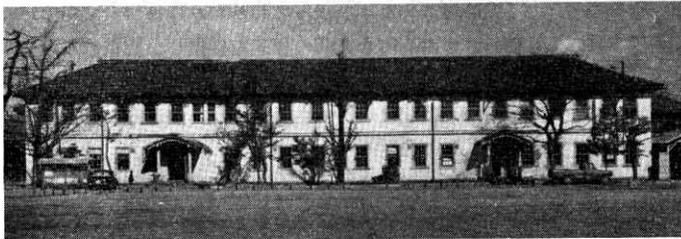
め、工場・停車場・兵営なども、様式よりはその技術に重点をおいて建設されたと見られる。必要とあらばわが国で未見の建築用煉瓦を焼き、ポルトランドセメント工業を興すことすら辞さなかったのである。もちろん工費に糸目はつけなかった。様式に関心をよせ、技術は伝統的な手法でという民間大工棟梁の洋風建築と、ここにおいてまったく様相を異にしているのである。

もちろん公的な、大規模な建築が多かったから、国家的な権力と結び莫大な資力が投入されたということもある。しかしその権力と資力とをもって、あえて導入し、摂取しようとしたものは、西洋建築の科学であり技術であり、その力であったことは注目すべきであろう。今日の“建築”という言葉に代って“造家”という、はるかに技術的・即物的なニュアンスの強い用語が、明治30年代初めまで用いられていたことも、わが国の建築界の上部構造が、西洋建築の文明をその価値によって高く買っていたことを物語るものである。

この価値派あるいは事実派ともいべき西洋建築の受容の仕方は、明治を通じて日本建築界の主流となったものの態度であった。それは1877年開校した工部大学校の造家学科における教育（コンドルを中心とした）と、その建築学によって建築界の上部構造に組みこまれた。西洋建築の技術や、それを支える建築学が“造家”という名のもとに、きわめて熱心に摂取されたのである。これは明治の科学や工学、あるいは新しい生産技術全体に共通するところで、明治国家の殖産興業の、また教育政策全体を規定する姿勢でもあった。それらを統一する様式は、しばらく西洋文明の様式で間に合わせてきた観がある。折衷主義の建築家コンドルによって進められた造家学の教育は、彼のもたらした純正な西洋建築のスタイルを熱心に学習し、よりヨーロッパ的に、よりイギリス的にと様式の直写や折衷に努力を傾けていたから、一見様式に対してきわめて敏感だったかに見えた。しかしそれは建築の工学や技術を形にまとめるための西洋的な典型にすぎない。西洋と日本の文明の様式の差、したがって、それを反映する建築の様式の違いにギリギリに対決する心情はなかった。それはけっきょく様式に鈍感だったからである。

6. 西欧化と近代化

工部大学校造家学科出身の建築家が活躍をはじめたのは明治の20年代に入ったところからである。彼らを中心に1886年には造家学会（今日の日本建築学会）が設立され、建築学の研究・教育・啓蒙活動も日本人の手によって熱心に推し進められることになったが、このころには、さきに述べた民間の棟梁によるいわゆる洋風建築は姿を消しはじめていた。



名古屋鎮台兵舎(1874年)。現在の竹中工務店の先々が請負った。この型式の兵舎は標準設計によって全国各地に建てられた。

明治時代の大学では、さきにも述べたように西洋建築のスタイルが熱心に学習され、建築家もまた思い思いの西洋建築の様式を、その作品に見せてはいるが、昨日はゴシック、今日はルネッサンスという具合で、それはさかんに摂取中の建築の科学や技術にまとまりをつけ、形をととのえるための借り物であった。和魂はその屈辱に対して自らを慰める意地のようなものではなかっただろうか。明治建築界の元老で、剛直にしてまた熱烈な愛国者でもあった辰野金吾(1854~1919)の日本銀行本店はルネッサンス様式であり、彼の生涯を通じて設計した200棟以上にのぼる作品には日本風のものは一つもない。彼にとっては日本風の建築を設計するなど、不忠であり国家に対して申し訳のない怠慢であった。明治時代の建築家の作品や思想を解析すると、そこには必ず精神と物、様式と技術という二元論をはっきりと出ているが、じつは、それは西洋文明の様式と価値に対応する日本人全体の今日に及んでいる選択の態度にかかり合った問題だったのである。そうして端的にいえば、明治以降今日に至る日本の近代建築は、主として価値あるいは事実の摂取と集積とに重点がおかれてきた。それに対応する様式はついに生れなかった。

その間に、もちろん西洋文明と日本文明の様式の差に決定的な意義を認め、西洋文明の価値を日本文明の様式に刻みこもうとした努力も見られる。

留学先で日本の古典建築について何も知らなかったことを反省し、帰国して大学に日本建築史の講座を設けた辰野金吾の態度にも、あるいは日本建築史の研究を進め、ついには中国をはじめアジア諸国の建築芸術を追って遍歴した伊東忠太の思想や作品にも、そうした意識は見られる。1910年から始まって明治末の建築界を賑わした「わが国将来の建築様式をいかにすべきや」の討論は、明治時代を通じて西洋の価値を事実を摂取した成果の上に、西洋文明と日本文明の様式の差をやっと検討する段階に来たことを物語っている。しかしその頃、導入された鉄骨や鉄筋コンクリート構造という新しい西洋伝来の価値が大きく影響をおよぼしはじめ、ついに再び西洋の価値と事実の吸収に没頭せざるをえなくなったのである。そのあまりにも大きい価値の前に「建築非芸術論」(1915年、野田俊彦)が叫ばれたほどである。様式の検討は吹きとんでしまったかの感がある。

「近代化における西洋派と土着派」(中央公論・1962・11)において文明の価値と様式との関連を明快に説いた山本新は、「明治には和魂洋才などといって、ともかく、日本文明がその主体性を失わず、西洋文明を洋才として駆使しようとする気宇をもっていたが、大正期にはいるころより、西洋化が加速度的に深化してきたのに、近代化の

担い手たちが、ごくわずかの例外をのぞいて、これと対決する緊迫感を失い、東西文化の融合などを唱えて西洋を宗主と仰ぎ、これに合一しようとし、全面的に西洋に追随し、自分の基準または座標を見失ってしまった。…「いわゆる近代主義というものがここで生まれた」とし、わが国における西洋派（西洋文明の価値には敏感だが様式に鈍感なもの。この逆が土着派）の本格的な誕生を大正時代に設定している。

しかし建築家の精神や思想がその作品に結実し、その作品を通じて建築家を評価するという冷酷な立場をとれば、その和魂にもかかわらず、いわゆる明治の大家たちも西洋派と断ぜざるをえない。だが大正時代に入って西洋派が圧倒的になったことは建築の世界においても事実であろう。もちろん鉄筋コンクリートの構造に対する独自の様式を探求し、「虚偽構造」に鋭い神経を集中した後藤慶二（1883～1919）をはじめ、建築史上の白樺派ともいべき一連の人の存在が大正初年に見られる。し



三菱旧1号館（現東9号館，コンドル設計，1894年）
典型的なイギリスゴシック様式である。

かし大勢はやがて和・洋文明の差に対する意識をほとんど完全に消滅し、近代建築思想が“導入”され、様式からの分離が叫ばれるに至った。分離は過去の西洋建築のスタイルの分離であると同時に、わが国においては、その建築の形をまとめるべき文明そのものの喪失でもあった。結果は当時にわかにクローズアップされてきた工業生産社会の発散していた造形のムードに、ユニバーサルな様式を期待するものであった。インターナショナル・スタイルとよばれたものがそれで、それは西洋文明の全地球的な拡大に魅せられたものではあるが、事実はそのような文明はありえないものであった。それは科学や技術という普遍的な価値そのものに様式を期待するという矛盾したことになった。科学や技術はそのものでは決して様式をとらないものである。この錯覚の上に“近代主義”が建築においても発生したのである。それは「建築非芸術論」と同根であり、機能が形を決定するというオートマティズムである。科学や技術の総合の上に、やはり形をつけねばならない建築家にとっては、まことにリ

アリティがなかった。

これに比べれば、精神と物、様式と技術という二元論をはっきり意識していた明治の建築は、その折衷主義の様式にもかかわらず、価値と様式とははっきり対立した緊張した精神の中に生まれている。それゆえに今日、われわれの関心を強く惹くのであろう。少なくとも近代主義とかインターナショナル・アーキテクチャ（国策建築）とかの大正中期以後今日に連なる様式への関心の喪失、あるいは緊張感を放棄したオートマティズムよりは、はるかに重みがある。

たしかにわが国はすでに一つの“西洋”であるかも知れない。われわれが選び、吸収した価値や事実は、その否定を許さぬほど重く蓄積されている。建築の学問においても技術においても圧倒的なウエイトを持っている。というよりは西洋の価値そのものの集積であるといった方が正しいかも知れない。ほかの科学や技術においてもおそらく同じ傾向が見られよう。



国会議事堂（1936年），幕末以来摂取、発展してきた戦前の建築技術の頂点を示すが、その様式は折衷主義である。

だが建築には形をつけなければならぬ。文明の様式とじかに対決することを強く要求されるのである。文明の様式が固有のものであり、折衷はもちろん融合とか同化とかを本来許さないものであるとすれば、その限りにおいてわれわれの建築は、価値はともかく様式において永久に“西洋”のものとはなりえないのである。強いて西洋を求めても、その西洋文明自身が内部から破たんしたの宣告を受け、建築の造形においても、その方法論を喪失しているようである。すでにかつてのように、スタイルの導入や、様式決定の方法論の移植を期待することはできない。事実を生む思想を自ら育てなければならぬ。

明治以来約百年、やっとなわれわれは独自の立場で、われわれのあるべき文明の様式を把握し、建築に具現しなければならない時点に到達している。それはおそらくわが国の近代化はいかにあるべきか、の命題とまったく合致するものであろう。

様式を西洋に借りていた時代の日本建築は、たとえその価値をいかに充実させたとしても、ほんとうの近代化とはいえなかった。西欧化というべきであろう。近代化はこれから開始されるべきである。（1964年12月9日受理）